
ISインフィニット・ストラトス～白き翼の敗北者～

にゃんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISインフィニット・ストラトス〜白き翼の敗北者〜

【Nコード】

N0795W

【作者名】

にゃんこ

【あらすじ】

（世界で唯一ISが使える男）織斑一夏。しかしISが使えるのは一夏だけではなかった！
白き翼の少年が舞い降りる

ブローグ

「ここは……？」

辺り一面緑で深い森のようで、木の葉がザワザワと揺れている。ここが何処なのか一切わからない。

俺はコロニーにいたはずだが、ここは地球のようだ。

コロニーのように、空の色が作られた物ではない。

そして俺にはわかる。俺のいた世界にはもう戻れないのだと

俺は体を起こし、ゆつくりと立ち上がる。

辺りを少し散策すると森を抜け、どこかの研究所らしき建物を見つけたが

「！？」

よく見るとその研究所からは黒煙が空に上がり、炎が吹き出している。

（一体誰がこんな事を！）

俺は研究所の中に入り、生存者を探す。

中ではもう崩壊が始まっており、アラートが鳴り響いている。それでも俺は内部まで深く進んでいく。

中は熱気が充満し、もはや目が開けられない程になっていた。

（クッ、ここが限界か……！）

俺が出口まで引き替えそうとした時

「ああ、例のモノを発見したよ」

（誰だ……！）

奥からは声が聞こえる、俺はさらに深く入る事を決めた

先ほどより奥に入るにつれて、熱気と声の大きさが高まっていく

「それでついでに研究所もついでに破壊しといた…… おっとお客さんだ、じゃあ切るね」

（気づかれた！？）

俺は再び出口に駆け足で向かう、これ以上は危険だ

奴は俺を、追いかけてくる様子はなく、ただじっと見つめてるよう
に思えた

「ヒイロ・ユイ君とまた会える日を楽しみにしているよ」

奴は何か言ったようだが、よく聞き取れなかった

俺は研究所の内部から脱出した。

（何者なんだ、奴は？）

その時、研究所の一角が爆発し、俺は意識を失った

設定

主人公設定

ヒロ・ユイ（出演作品・新機動戦記ガンダムW E n d l e s s
W a l t z）

年齢 16 歳

身長 156 c m

体重 45 k g

特徴：もといた世界では、コロニー側の工作員として幼少期から過酷な英才教育を仕込まれて育ってきた少年。身体能力、戦術、反応速度、G、などいずれも並外れており人間の限界値を全て越えている。

性格は無口であり無愛想もあり無鉄砲である。しかし無口ではあるが動揺や取り乱したり、感情的になる事もある

しかし正義感などは全くなく、あくまで感情のまま（無意識のまま）行動する事が多い

I S

『ウイングガンダム』

形式番号『X X X G - 0 1 W』

全長3・4 m

第四世代IS

ヒロが元の世界にで乗っていた機体。機体性能は機動性、旋回度などスピードに優れており、ISでは基本考えられない変形（バード形態）をする事が出来る。

設計面ではドクターJが何か関わっているようだが今の所は不明
武装では、近接、中遠距離の二つで一つがビームサーベル、もう一つはバルカン、最後にマシンキャノン、中遠距離はバスターライフルの四種類

武装

バスターライフル

ビームサーベル

バルカン×2

マシンキャノン×2

単一仕様能力《?????》

バスターライフル

Wの武器の一つで、エネルギーを物質化寸前まで縮退化させて詰め込んだ専用カートリッジを銃身に三つ装着している。最大出力で発射した場合は三発全て使い切る事になる。

ビームサーベル

シールドに接近専用武装。

水中で出現させても一切減衰しない程の高出力になっている。

バルカン

頭部に内蔵された2機の機関銃

攻撃力は低く、牽制や威嚇などの事に使われる

マシンキャノン

両肩に2機内蔵された機関銃

頭部バルカンよりも大口径で、ある程度のダメージを与える事が出来る

シールド

バード形態の機首を兼ねるシールド。

それ自体の強度に加え、表面に施された特殊コーティングによって実弾、ビームを問わず堅固な守備力を誇る

バード形態時は先端のバスターライフルと接続する。

先端部は鋭利でそのまま打撃武器としても使用出来る。

バード形態

高速移動用の巡航移動形態。

頭部、下半身を180°回転させ（この場合本人の向きは変わらない）クランク状に収縮。

両腕は肩アーマーを畳み、手首収納と同時にランデイクローを展開背部のウイングを展開させシールド、バスターライフルを背部ジョイントにマウントして変形完了する

『ウイングガンダムゼロ』

形式番号『XXX-GOOWO』

全長3.4m

第四世代IS

搭乗者 ヒイロ・ユイ

概要

ヒイロの世界でオペレーション・メテオが発動される約15年前で六人の科学者がコスト、実用性を度外視し高性能のみを追求した機体。

MSにおいても加速力、機動性、運動性能、飛行能力などは他のMSを圧倒していた。

ISにされても、性能に変わりわない

単一仕様能力『ゼロシステム』

『ゼロシステム』とは、分析・予測した推移に応じる対処法の結末

や対処法が搭乗者の脳に直接伝達するシステムで、端的に言うと、勝利するために取るべき行動をあらかじめパイロットに見せる機構である。

IS内の高性能フィールドバックによって脳内の各生体用スキャン後、神経伝達物質の分泌量をコントロールすることで急加速、急旋回の衝撃、加重などの刺激情報の緩和などをし、通常では活動出来ない環境下での機体制御を可能にする。

しかし『ゼロシステム』を使うだけで、状況によって搭乗者自身の死、機体を自爆、友軍の犠牲もいとわない攻撃など非人道的な選択により、精神に多大な影響を及ぼす。

ネオバード形態

「ネオバード形態」と呼ばれる戦闘機形態。

変形方法は背部のウイングを展開させ頭部、下半身を180°回転させ両膝、両肩を折り畳み足首収納と同時にバーニアを露出、フロントスカートとサイドアーマーを副翼の如く立たせた後、シールドとツインバスターライフルを背部にジョイントにマウントして変形が完成する

ツインバスターライフル

二挺のライフルを平行連結させた二連装型バスターライフル。

ネオバード形態時では、シールドの左右に固定される

威力はWガンダムの二倍の威力を発揮しフルパワーで放てばISの絶対防御を貫通させる事も可能（その場合は最高三発まで）また二挺に分割して別方向に同時射撃したり、出力を調整して連射性を高める事も可能

武装

ツインバスターライフル

ビールサーベル×2

マシンキャノン×2

バルカン×2

シールド

説明が書かれていない武装はWガンダムの時と変わりありません

ヒロ、IS学園に入学する（前書き）

えーっと、初めまして読者の皆さん。この小説を書いているにゃんこです。

始めに読んで下さいましてありがとうございます。この作品が処女作なので、未永く見守って下さい。

では本編をどうぞ

ヒロ、IS学園に入学する

千冬 side

「早く、消火と負傷者を運べ！グズグズするな」

（一体誰だ、ここまでする奴は……？）

破壊された研究所を見る。最近はIS関連の研究所が襲撃される事が多い。

「織斑せんせい」

こちらに向かつて山田君が走ってくる、何かわかったようだ。

「どうした、山田君？」

「えつとですねえ……コレです」

山田君は書類の一部を抜き出し、こちらに渡してくる

「……これは!？」

私が見たのは、大人一人が一撃で死に至る爆発を受けてなお生きている少年の写真だった

「おかしいですね、本当ならもう死んでいてもおかしくないはずなのに……」

山田君の言う通りだ。本来なら即死なのにこの少年は生きている。

「山田君、彼は今どこにいる？」

「えつと今IS学園の医務室だと思いますが」

「よし、向かおう」

「ハイ」

私達は急いでIS学園に向かった。

side ヒロ

「……………」

俺は上半身を起こす。

そして自分が怪我をした場所を見てみると包帯や絆創膏や湿布などの数々の処置が施されていた。

辺りを見回してすると、他にもたくさん医療器具が置かれている。どうやらここは、軍かどこかの医務室らしかった。

そんな事を思っているうちに傷は痛み、そして痛みと共に奴の事も思い出した。

（一体、誰だったんだ……）

その時、ドアにノックがあり、誰が入ってきた。

「失礼する」

入ってきたのは、全身黒のスーツで固めてきた女性だった。

「寝ていた所すまないな」

「問題ない」

「私の名前は織斑千冬だ。IS学園で教師をしている」

ISという言葉に違和感を感じたが相手がそのままスルーし質問をした。

「さて君は何者だ？なんて言う名前だ？私達が調べた結果、何処の国籍にも当て当てはまらなかったのだが……」

「俺の名はデュオ・マックスウェルだ」

「デュオ・マックスウェル？君の名はヒロ・ユイじゃないのか？」
自分の名前を言い当てられ驚く

（何故コイツは俺の名を知っている……？）

黒服は、一枚の手紙を出す

「少し前に、誰当てかわからない手紙が届けられてな。もしかと思
い中を見てみると君の事とこれ……」

中に入っていた物を一つずつ出していく。

写真、書類など俺に関する情報が数々入っていた

そして黒服が、光る何かを取り出す。

「これに見覚えがあるか？」

黒服が取り出したのは、白い翼が装飾されたブレスレットだった。

「いや全くない……」

黒服はため息をつきこう言う。

「「ややこしい事にならずに済んだが、悪いが君はIS学園に入らなければならなくなったようだ」

「ISとは一体なんだ？」

「すまない君はこちらの事は一切IS皆無だったようだな、ISとは――」

それから一時間程度この世界のついてにいろいろ話した。

「という事はこの世界でのISという存在はMSと同じになるのか？」

「ああ確かに。だがISは条約で兵器として使用する事は一切禁じられており、今はスポーツの競技として使われている」

ISは一つ間違えば人を殺すの道具になりかねない。そしてMDのように使われれば、大量虐殺する事も出来る。

「大丈夫だ、お前がもといた世界のようににはならない。さて今後のお前の事だが――」

俺はこの世界では、居てはならぬ危険な存在だ。それなりの覚悟は出来ていた。

「お前には二つ選択肢がある。「一つは国家に明け渡される事、もう一つはIS学園に入学する事だ。」

「二つ？一つじゃないのか？」

コイツの話を聞いた限りではISは女しか乗れない。しかもIS操縦士を育成する学校ならなさだ。

「いいや二つだ。奇跡的にな」

「奇跡的？」

「ああお前は男の身でありながら、ISを動かす事が出来る」

「検査の結果お前がISを操縦出来る事が証明したんだ。さてどうする？」

「お前に任せる」

「フツ、そう言うところの手紙に書いてあったよ。ではお前にはIS学園に入学してもらう、依存はないな？」

「了解……」

「それからこれからは生徒と教師の関係になるから、お前ではなく織斑先生と呼べ」

「了解した……」

「ここに手紙を置いて置くからな。」

奴ではなく織斑先生は、机に手紙を置き医務室から出た。

俺は再びベットに横たわる。

そして俺は新たな世界での生活が始まった。

ヒロ、IS学園に入学する（後書き）

さて話の内容はいかがだったでしょうか？まだ話が進んでないので感想は書きずらいと思うのですが書いていただければ光栄です。感想待ってます。

俺のISその名は、（前書き）

ああとりあえず頑張って書いて見ましたー本編をどうぞ

俺のISその名は、

ヒイロ side

俺はふいに目が覚め、今までの事を思い出す。時計は夜中の二時を指していた。

何故俺がこの世界に来たのか、事故なのかそれとも運命なのか、どちらにせよこの学園にお世話になる事になる

(やっかいはかけられないな……)

俺は、再びベットに横になり朝まで眠りについた。

〓次の日〓

「……」

俺は目が覚め、ベットから起きあがる。怪我した場所を少し動かしてみても、もう大丈夫になっていた。

(これならいけるか)

そうしているうちに織斑先生が入ってきた

今日も黒で固めてきている

「おはよう、怪我の調子はどうだ？」

「問題ない、むしろ調子がいまいくだ」

「そうか、いやしかしお前には本当に驚かされるな。身体能力、反応速度など人間の限界を越えている。普通の人間なら一日二日は寝込んでいるはずなのだが……これに着替える」

織り斑先生は俺に向かって服らしき物を投げてきた

「うちの学校の制服だ。早く着替えろ、今日はやる事がたくさんある」

織斑先生はそう言い残し、部屋から出た。

俺はさつさと制服に着替える

「入っていいか？」

「ああ」

織斑先生は、ドアを開け部屋に入ってくる。

「なかなか似合っているじゃないか。それでは付いてこい。まず最初にお前の部屋に連れていく」

「わかった……」

それから織斑先生に付いて行き、学園内の寮についた。

（大きいな……）

寮は三階建てで、元いた世界の学園の中ではこの学園はおそらく大きい方に入るだろう。

「どうした？」

「いや、何でもない」

寮の中に入り、受付で簡単な手続きを済まし、部屋へと向かう。度々多くの視線を感じたが、気づかないふりをした。

織り斑先生は一つの部屋の前で止まる。

「さあここがお前の部屋だ」

「1036室だから、ちゃんと部屋を覚えておくように」

「わかった……」

「一時間後にまた来るから、それまでに部屋の整理をするように、取り合えず一応必要な物は揃えておいた。それと携帯は必要だろう。私の好みで選んだがそれでいいか？」

「問題はない」

織斑先生が選んだのは黒一色で染められた、シンプルな携帯だった。

「では一時間後に」

織斑先生は、来た道をまっすぐ戻り角を曲がった所で見えなくなつた。

俺は部屋に入り、一カ所に積まれた段ボールの一部の中を開け、中身確かめる。

衣服や雑貨などで分類されているらしい。

それから一時間くらいの間で、一通りの荷物を整理する事ができた。
「整理は終わったか？」

「ああ一通りだが」

「では次に行こう。お前のISを調整する時間がなくなってしまつ」
織斑先生は、スタスタと歩き出す。

「おつとその前に」

織斑先生はいきなり止まり、くるつと反転した。

「どうした？」

「ヒイロ、お前昨日から何も食べていなかったな」

そう思えばこちらの世界に来て何も食べていなかった事を思い出す。

「確かに、それがどうした？」

「ついでだ、食堂に案内したついでに昼食をとる」

「別に取らなくても生きていけー」

「言う事を聞け」

と言っている時に言葉を遮られてしまった。

「了解」

「よし、では行くぞ」

今度は食堂に向かい、それぞれの昼食を取った。

俺は全て見たことのない料理に対し、適当なカレーを選んだ。

先生の方は、日替わり定食を選んでいた。

「ほうカレーか。あつちの世界では一体お前な何を食べていたんだ？」

「対して代わりはないが、ここに置いてある料理はほとんど食べたことがないな……」

織斑先生は一瞬戸惑った表情をしたが、すぐにいつもの表情に戻した。

「これからは、食べられるといいな」

「そうだな」

その後黙々とカレーを食べ、食堂を出た。

「さて、今から第三アリーナへ向かうからくれぐれもはぐれるな」

「わかっている」

寮から出て、アリーナへと向かう。おそらくはISの性能テストだろう。

第三アリーナに着き、織斑に新たにある物を渡された。

それは俺が元いた世界のパイロットスーツに似た服だった。

「これは……？」

「ISスーツだ。ISを操縦する時には、必ずと言って言い程大切だからな。まあそれも粒子化されていた物呼び寄せたまでだが、それを来てアリーナの中のピットまで来い、わかったな？」

「了解した」

先生は、先にピットへ向かった。俺はその前にISスーツに着替えなければならぬので更衣室に向かう。更衣室に着いた俺は、今来ている服を脱ぎ、ISスーツへと着替える。

まさにパイロットスーツのようだが、頭のヘルメットではなく少しスマートになっていた。

（俺以外にもこっちに来てる奴がいるのか？）

あまりにも、不振な点が多い。おそらくはまだ尻尾を出さないだけだろうが、いつかは必ず尻尾を出すに違いない。

俺は、ロッカーの中に着ていた服をまとめピットへと向かった。ピットに着き、中に入る。

「遅かったじゃないか、待ちくたびれる所だったぞ」

「すまない」

「では、ヒロ。これからお前のISの性能実験を始める、これがお前のISだ」

そういつて渡されたのが、昨日のブレスレットだった

「これはISの始動キーだ、頭の中でお前が思うISをイメージすれば体に装着されるはずだ」

「わかった」

ブレスレットを握り意識を集中させる。

大きく背中に取り付けられた翼、巨大なライフルそして頭に取り付

けられたV字のアンテナーそうそれはまさに
ウイングのような

俺は目を開けた、すると……

「これは！」

背中には二本の翼が付いておりイメージした通りの物だった。

ウイング
「W……」

思わず口から言葉が出てしまった

俺のISその名は、（後書き）

ヒイロ結構難しいです、頑張って明日も更新したいです

燃え尽きない流星（前書き）

えっとヒロファンの方々すみません
お世辞でも似てないとはつきり言われるような作品になってしまいました

燃え尽きない流星

ヒイロ side

「ウイング……」

思わず口から言葉がこぼれる。

（何故ここにWが……？）

やはり誰かが来ている？

脳裏にとある人物が浮かび上がる。

それは――

ドクター」。Wガンダム^{フルスキン}の生みの親だ。」が来ていれば、全て辻褄が合う。

俺は、心の中で整理し、今はその事を忘れる事にした。

「そのISは完全装甲、ISにすれば珍しいタイプだ」

「完全装甲で何か違いがあるのか？」

「いや特にはない。さて今からテスト飛行を始める。ヒイロ、カタパルトにつけ」

「了解」

俺はカタパルトに接続する

「準備はいいか？」

「問題ない」

目の前のランプが、一つずつ消えていく。そしてランプが緑になった瞬間――

バシユウウウン

勢いよく、カタパルトが前進し、前方へと飛び立つ。

そのまま流れに身を任せ、丁度いい所で急停止をする。

「どうだ、初めてISに乗った感じは？」

無線で織斑先生との会話が入ってきた。

「悪くはない」

「そうか、ならまずは基本動作からだお前のISは全距離対応型だ、オールマイティ全ての距離に対する武器が粒子化されている。まあお前なら説明せずともわかるだろう。いまから出てくる的を打ち落として見る」
「了解」

といった矢先に的が現れる。的は空中に浮かぶ風船のような物で攻撃を当てるだけで消える仕組みになっているようだ。

俺は初期装備のバルカンで的を打ち落とす
次々と的を打ち落とすがまだまだ出てくる
が、バルカンとマシンキャノンでさらに的を打ち落とす
ビュユン

シールドからビームサーベルを取り出し、的を切り裂く
(まだだッ！)

ビームサーベルで、的を薙払いし、そのまま他の的も巻き込む。
的は、収まるどころか溢れんばかりに出てくる。

千冬「side」

(想像以上だな……)
ディスプレイを見ながら思う。

今までたくさんのIS操縦者を見てきたが、初機動でここまで出来た奴は初めてだ。

(やはりMSか?)
おそらくそうだろう。今までMSを動かしてきたおかげでここまで出来る。

それ以外にもあるだろうが、大きくはそれが関わっているようだ。
ヒイロは次々と的を打ち落としていく

「よし、ヒイロ。バスターライフルを出してみろ」
「了解」

ヒイロは粒子化したライフルを取り出す。
バスターライフル――

あの手紙には取扱い注意と書かれていた。

（一体どういう事だ？）

扱いには注意がいる程危険な武器なのか？

「よし、それでは今から出る的に当てる。ただし一発だけだいいな？」

「わかった」

対銃撃用の的を展開させる

これなら、ある一定の威力までなら防ぐ事が出来る。

ヒイロは、的に向かって狙いを定め砲撃した

ドコオオオウウン

辺りは砂煙と黒煙が舞い上がる

（何だ、このライフルは！？）

取扱い注意とはこの事だったのか、と今更悔やんでも仕方がない。

損傷した箇所を見ると対銃撃用の的にしといたため、大きな損傷は見られなかった。

しかしあの武器は危険だ。フルパワーで撃てば絶対防御は貫通したかねない。

バスターライフルの弾数を見ると最低三発までしか撃てないらしい。
ヒイロに無線を繋いだ

「いいか、ヒイロよく聞け。そのライフルの威力にリミッターを掛ける。私が許可した時しかフルパワーでは撃てない、いいな？」

「別に構わない」

「よし、それでは今から模擬戦を行う。お前の相手は――山田君」

ヒイロside

他のピットから一機のISが出てくる。

「どうやらコイツが相手のようだ」

「ヒイロお前には、この緑のISの山田君と戦ってもらつ。準備はいいな？」

「ああいつでも構わない」

「えっと、えっとよろしくお願いしますッ！」

「よろしく」

「それでは始めッ！」

ブザーが響く

相手のISは距離を取り、射撃攻撃を行ってくる

（早いッ）

一気に間合いを積めるが、引き離される

どうやら相手は射撃戦が得意のようだ

俺はマシンキャノンで牽制し、バスターライフルを呼び出し放つ
ビュウウウン

（後二発……）

バスターライフルは弾数があるため、最高三発までしか撃てないため、後二発しかない

さっき撃った弾は、掠るもの的大したダメージにはならなかった

マシンキャノンで牽制するが相手の方が連射性が高く、押し負ける。

俺は下に下降し、変形した

無線から驚きの声が上がった

そのまま飛行し一気に上昇する。

相手は、弾を連射するも当たらない

「これで終わりだ……」

バード形態のまま、緑のISに向かってライフルを撃った

緑のISは、ゆっくりと下降していく

「勝者ーヒイロ・ユイ」

燃え尽きない流星（後書き）

えっとどうでしょうか？

ヒロのISが登場したので、設定を書き加えようと思います

ゼロと呼ばれたG（前書き）

今回はそこそこうまく書けた気がします！どうぞ

ゼロと呼ばれたG

ヒロ side

「勝者ヒロ・ユイ」

ブザーと共に終了の合図がなり響く。

目の前のISはピットへの帰還を始める。

俺も戻ろうとした時――

「何!？」

ウイングが金色に光る

おそらくこれが

ファーストシフト

「一次移行……」

「ヒロ、そのまま一次移行が終わるまで待て」

「了解」

Wが形態を変える

それは一瞬の出来事だった

一次移行はあつと言う間に終わる

「よし、ヒロ。ピットまで戻ってこい」

「了解」

俺はピットへと帰還した

ピット内部

俺はピットへと帰還する

さつき戦ったISのパイロットが話しかけてきた

「初めましてヒイロ・ユイ君。私はIS学園で教師をしている山田摩耶です、宜しくお願いしますね」

「ああ、よろしく」

「それにしても強いですね、何処かで訓練されていたんですか？」

「ヒイロそれよりもだな？」

会話の途中に織斑先生が入ってきた

「一次移行の事か？」

「そうだ。お前のISは初期化と最適化を済ませ晴れてお前専用のISとなった」

「まあこれを見る」

ディスプレイに俺のISが浮かぶ

「形式番号XXX-00W0……ウイングガンダムゼロ」

「それがこのISの名前か？」

「ああ」

（ゼロをお前はまた俺を導いてくれようとしてくれているのか……？）

「武装面では、バスターライフルからツインバスターライフルになったのか……何！威力が二倍だと！？またリミッターを掛け直さないといけないな」

織斑先生は次々と解析を始めた

「それと……何々初期段階あの早さを上回る早さか、仕方がないIS全体にリミッターをかけるしかないか……」

「お前のISとなったからには、規則があつてだなこれを読んでおけ」

織斑先生が渡したのは、厚さ10cm程の本だった

「ISに関する規則が全て書かれている。ちゃんと読んでおくように」

そのまま本を受け取る

「一次移行して何か変化はあつたか？」

「今は問題ない」

「そうか、今日はもう部屋部屋に戻って休め」

「わかった」

俺は第三アリーナを後にした

千冬 side

「どうだった山田君、ヒロの感想は？」

「えーっと……織斑先生、ヒロ君は本当にIS今日が初起動ですか？」

「だろうな、だが奴は昇進証明ISは今日が初めてだ」

「そうですか……あの動きは代表候補生、あるいはそれ以上ですね」

それとあのIS変形していましたよ？あんな事ありえるんですか？」

「普通ならありえん。普通ならな？」

山田君は顔をしかめた

（束……お前が手を貸しているのか？）

彼奴が手を貸していれば、これ程のISを作るのは造作もない事
いやしかしIS本体の性能は上がったとしても、ツインバスター
イフルー……

あれ程威力を持った武器は、作れないだろう

（他に支援者がいる？）

「織斑先生？大丈夫ですか？」

山田君が心配した表情で、こちらを見てくる

「大丈夫だ、心配ない。少し考え事をしてただけだ、山田君も疲
れている帰っていいぞ」

「ええ、わかりました。ではお先に失礼します」

山田君はピットから出ていった

山田君がいなくなったのを確認すると、携帯を取り出しある人物に
電話をかける

プルルルル……ガチャ

「もしもし束か？」

かけた相手は篠ノ之 束
ISの開発者だ

「あつ、ちゅちゃん！元気にしてたかな？束さんは寂しくて死にそ
うだよ」

「そうか、なら私にある事を教えて死んでくれ」

「えー酷いよーちーちゃんの鬼畜〜で、ある事は何かな？」

「ヒロ・ユイは知っているか？」

「知ってるよーやっぱりわかった？」

「当たり前だ、馬鹿者」

（やはりコイツが関わっていたか）
という事はやはり一人か？

「奴のISを組立たのはお前か？」

「そうだよ、まあでも今回は一人じゃないけどね」

「一人じゃない？支援者がいるのか？」

「ここからは秘密〜いくらちーちゃんでも教えられないね。じゃバ
イバ〜イ」

電話が切られる

もう掛け直しても無駄だろう

束は一人じゃないと言っていた。という事は、複数いると言ったことだ

（だが、今は関係ないか……）

おそらく束は、まだしかけては来ない
時を待つ事にし、私はピットから出た

ヒロ〜side〜

俺は今第三アリーナから寮に帰っている途中だった
今日あった事を振り返る
俺のISの事だ

一次移行があつた後、俺のISはウイングからウイングゼロへと変化した

（何故Wだ？）

普通のISは完全装甲などではなく、各箇所ずつに装甲がついているおそらく理由は、Wに近づけるためだろう

（しかし何の為？）

一体何の為になのかわからない。でもまたこれであちらからこちらに誰かが来ている確率が高くなつた

（彼奴等が……来ていればいいのだがな）

俺は寮へと走って帰つた

～寮の中～

俺は部屋へと直行する

さつき気のせいだろうか？

何故か大量の視線を感じた気がする。俺は、食堂に行くため部屋に鍵を掛け、部屋を出た。

～食堂～

今日は昼、カレーを食べたので他の料理を選ぶ事にした
他にもたくさん料理があるのだが食べた事がないため、適当な奴
を選んだ
選んだ奴は若鳥の竜田揚げだった

「はい、出来たよ」

「ありがとう」

俺はふと気づく

（一体いつからこんなに人間らしくなったのだろう……昔の俺だっ
たら言わなかったのだろうな）

そうだ多分彼奴等と会って、そして彼女と出会ったから……

今では感謝している

俺はすぐに席について、夕食を食べる

相変わらず、視線を感じたが気にせず部屋に戻った

（部屋）

取りあえずシャワーを浴び、部屋用の服に着替える

「さてと……」

椅子に座り、机に取り付けられているパソコンを使って自分のIS
の解析を始める

カタカタカタカタ……

「IS性能、各種機能、兵器各種……」

（駄目だ、これじゃない）

次々とキーボードを叩くが、どれも探し物に当てはまらない
すると、ディスプレイにある文字が現れる

『ゼロシステム』

「『ゼロシステム』」

やはりこれも搭載されていたか

『ゼロシステム』は分析、予測した状況の推移に応じた対処法の選
択や結末を搭乗者に脳に直接伝達されるで、勝利するために取るべ
き行動あらかじめパイロットに見せる機構だ

極端に言つと、勝つためには手段を選ばないシステムの事で俺も何
度か『ゼロシステム』に巻き込まれた事がある

俺は全てのタブを閉じ、パソコンの電源を切りベッドに倒れ込む

（ゼロよ、俺を導いてくれ）

そのまま意識が遠いていった……

ゼロと呼ばれたG（後書き）

どうでしたか？感想もらえると作者が喜ぶので書いていただければ幸いです

二人目のIS操縦者（前書き）

設定追加しましたので、わからない事があれば

二人目のIS操縦者

なヒイロ side

チュンチュン

（もう朝か……？）

この学園に来て一週間が経つ。この前のISテストからは三日が経った

俺はあれからISを一度も動かしていない。理由は「お前にISを操作させると新しく入る一年との差が大きくなる」と織斑先生との事だ。

それから部屋の整理、織斑先生の仕事の手伝い、ISの解析などをしている

そして今日は、IS学園の入学式……だが俺は出ると悪いらしいので部屋で待機（これも織斑先生からの指示）をする事になった

部屋に取り付けられた時計に目をやる。

そろそろ織斑先生が迎えに来ることになっている

俺は、身支度を始めた

（15分後）

あれからすべての支度を済ませた。

そろそろ来るはずの時間体なのだが、一向に来る様子がない

（遅いな……）

と思っていた所――

ガチャ

ドアノブが開かれ、織斑先生が入ってきた。

「おはよう、さあ行くぞ」

俺は部屋を出て、教室へと向かう

「遅かったな」

「すまない、職員会議が長引いてな……」

「そう言ってもらえると助かる。ヒロ少し早めに行くぞ間に合わなくなる」

「了解」

俺達は少しペースを上げ教室へと向かった

――夏side――

（これは……想像以上にきつい……）

今日は高校の入学式。新しい世界の幕開け――なのに

俺以外のクラスメイトが女子っていう事

自意識過剰ではなく、本当にクラスの人間全員からの視線を感じる
だいたい座っている席も悪いなんでクラスの真ん中で最前列なんだ
？すごく目立つ

俺はちらりと窓側に目をやる

「……………」

何かしら救いを求めての視線だったんが、薄情な事に幼なじみの篠ノ之箒はふつと窓の外に顔をそらした。なんて奴だ。これが六年ぶりに再会した幼なじみに対する態度だろうか。…………いや、もしかして俺嫌われてるんじゃないか？

「…………くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

いきなり大声で名前を呼ばれ思わず声が裏返ってしまった。

「あっ、あの大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるからな？だ、ダメかな？」

気がつくと副担任の山田摩耶先生がぺこぺことした頭を下げていた。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……………ってどうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

がばつと顔を上げ、俺の手を取って熱心に詰め寄る山田先生。…………あの、またすごい注目を浴びているんですが。

しっかりと立って、後ろを振り向く。

(うつ……)

今まで背中に感じていただけただけの視線が一気に俺に向けられたいるのに自覚する。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

儀礼的な頭を下げて、上げる。

「……………」

だらだらと背中に流れる汗を感じる。どうしたらいい、何を言えばいいんだ。

(いかん、これでは『暗い奴』のレッテルを貼られてしまう)

俺は、深呼吸をして思い切って口にした

「以上です」

がたたつ。思わずずっとこける女子が数名いた。無茶に決まっているだろ

パアンツ！ いきなり頭を叩かれた。

「いっ……！？」

痛い、と言つ無脊椎反射より、あることが頭をよぎった。

「……………」

おそろおそろ振り向くと、黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられるがけして過肉厚ではなくいボディライン。組んだ腕。狼を思わせる鋭い吊り目。

「げえっ、関羽!？」

パアンツ！　また叩かれた。ちなみにすっげえ痛い。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスの挨拶を押しつけてすまなかったな」

いやしかし何でここに千冬姉がいるんだ？職業不詳で月一、二回程しか帰ってこない実の姉が。

「い、いえっ。副担任ですからこれくらいはしないと……………」

「さて諸君に私の自己紹介をする前に…………ヒイロ、入れ」

ヒイロ？緋色の事か？

ドアが開き、一人の少年が入ってくる…………って少年!？

「ヒイロ・ユイだ…………よろしく」

「ヒイロはそこにいる織斑と同じ初の男性IS操縦者だ。みんな仲良くとは言わないが、わからない事があつたら教えてやれ、いいな?」

「キヤー——」

「内のクラス二人目の男子よ！」

「美形だわ、美形！」

「……フフフフ」

一気に音の嵐が巻き起こるって一番最後の人何あれ？
しかし新しい生徒さんは顔色一つ変えずにいる。

「……毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

「ヒイロお前は……そうだなオルコットの隣に座れ」
「了解」

と千冬姉が指を指した場所に移動していく。

（何か機械みたいだな）

そう思ったのは俺だけなのか？

それから千冬姉……ではなく織斑先生が自己紹介をし女子の黄色い音の嵐が起動し、織斑先生のやれやれとした顔をしてSHRは終わった。

二人目のIS操縦者（後書き）

えつとどうでしたか？

まだまだ後の話はたくさんあるんですが感想いただけると幸いです

謎のパイロット達（前書き）

今回は少しオリジナルを入れてみました

謎のパイロット達

ヒロ side

「ふう……」

IS学園に入学して初日、早くも一時間目のIS基礎理論授業が終わった。

新たに支給されたIS関連の参考書のおかげである程度はわかる。

（さて、この状況どう打開する？）

今俺は大変な事態に陥っている。それは回りが全員女子ということと、その女子達が俺に視線を集めているという事だ。別に苦しいという訳でもないのだが、人に見られたり、観察されたりするのはあまり好きではない。しかもそれが研究などでもないからならさだしかももう一人の男のIS操縦者はいつの間にかどこかに行ってしまった。

やはり回りの視線は気になるが、それを無視し次の授業の予習を始めた。

キンコンカーンコン。

そして次の授業が始まった

「……であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によまって罰せられ……」

たんと授業を進めていく山田先生。やはり予習したかいがあった。ISの事が全くわからない俺でもついていく事が出来た。

ふと俺はもう一人の男の方に目を向ける。席が後ろの方なので後ろ姿しかわからないが、青ざめているのがわかる

何かに気づいた山田先生は奴の席へ行き

「わからない所があった所はきいてくださいね。なにせ私は先生ですから」

「先生！」

「はい、織斑君！」

二人とも気合いに満ちている

「ほとんど全部わかりません」

思った通りだった

「え……。全部、ですか……？」

山田先生は他にわからない人はいるかと聞くと誰も答ええない

「……………！」

頭の中に何かよぎってくる。

なんだ、これは！？

ゼロシステムが発動した時と似ているが何か違う。そして頭の中に何か浮かび上がってくる。これは―――MS？

（一体、なんだ……？）

二機のMSに取り巻くように科学者達が何かをしている。奴等は何者だ？そして新しく二人のパイロットが入ってくる。

一人は赤みがかった髪の色をして、顎髭を生やし、少し浅黒く焦げた肌の色をしている。

もう一人は、少年のような顔つきで黄緑の髪の色をしている。そして二人はパイロットスーツみたいなものを着ていた。（誰だ……？）

二人は何か話しているようだが、会話は聞き取れないので、口の形を見て読みとるがわからない。
だが次の瞬間奴らは言った

ガンダム……と

映像はそこで切れた。

謎のパイロット達（後書き）

すいません区切りをつけたかったので短くなってしまいました
次はついに、クラス代表が決まりますので勘弁を

クラス代表などどうでもいい b y ヒイロ・ユイ（前書き）

完成しましたー！

クラス代表などどうでもいい by ヒロ・ユイ

「はあはあ……はあ……」

呼吸が乱れる。誰だ、奴らは？明らかにMSスーツを悪用しようとしている。

（あの研究者達は……？）

俺はもう一度あの映像の一部を思い浮かべる。あの中にいたのは――

（「J！」）

いやJがこんな事するはずがない。だが万が一、そんな事があったならば、俺はJを殺さなければならぬ

「どうした、ヒロ？」

そう考えていたのを不思議に思ったのか、織斑先生が、話しかけてきた。

「いや、何でもない」

「そうか、ならいいが……」

織斑先生は元居た場所に戻る。

まだこの事を話すべきじゃない。時期は来るはず。
キンコーンカーンコーン

授業終了の合図が鳴った

俺も、この事を頭の中の隅に置き、今の事に目を向ける。
そう今は、また籠の鳥状態に陥る。そしてまたどう打破するか考えている内に

「ヒイロ……ユイ君だよね？」

話しかけてきたのは、もう一人の男のIS操縦者だった。

「何のようだ？」

「えっと俺織斑一夏って言うんだ、一夏でいいから宜しく」

ソイツは手を延ばし握手を求めてくる

「よろしく……」

俺もその握手に答える。

「ヒイロでいいかな？」

「別に構わないが……」

「それじゃあ、ヒイロ？折り言って頼みがあるんだけど……」

「IS関連の事は断るが？」

「……………」

凶星だったらしい

「そんな事言わずにさあゝ頼むよゝヒイロゝ」

一夏は俺の制服を引っ張りながら揺する

「よせ、服が破けるッ！」

「ちょっとよろしくて？」

「へ？」

「悪い、今は忙しいから後にしてくれ」

声をかけてきたのは、隣の席の人だった

見た目からして何処かのいい所の娘だろう。何故か元いた世界の最初に会ったときの彼女を思い出す

「まあ！なんですね、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「お互い価値観が違うようだ、それに俺はお前と話す時間は兼ね備えていない、邪魔だ失せろ」

「あなた、私に向かつてなんて言うの！？邪魔なんてそんなお下品な言葉使わないで下さる？」

「もう一度言う、邪魔だ」

「せっかくこのわたくしがあなた達にISについて教えようとしていたのに、何ですか、あなた達は！」

「別に何でもないが……」

オルコットと話しているうちに一夏が口をはさんできた

「あのー一ついいか？君って誰？」

「あなたもそれ本気で言ってるじゃない！この入試主席でイギリス代表のセシリア・オルコットを……！」

「本当に貴方達は無礼で会ったり無知であつたり、メチャクチャですわね！……まあそれでもわたくしは優秀ですから、あなた方のような人間にも優しくしてあげますわよ？」

「そんなのはいらん」

「あなたに言つてませんわ！」

俺の言った言葉に反発してくる

「ISの事でわからない事があれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げててもよくつてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートなのですから」

今聞いた限りでは唯一、という言葉が強調された気がする

「教官なら俺も倒した」

「俺も倒したぞ」

「は……？」「わ、わたくしだけと聞きましたか？」

「女子だけってオチじゃないのか？」

ピシッ

今何処かで変な音がしたような。奴の音だろが

その後の標的は一夏に代わり、怒濤の剣幕で攻撃していた

キンコンカーンコン

二人の話に割って入ったのは三時間目開始のチャイムだった。やつと解放されるのか

「っ……またあとで来ますわ！逃げない事ね！よくつて！？」

と捨てゼリフを吐きながら隣に座って睨みを効かしてくる

次の授業は二、三時間目とは違い織斑先生が教卓に立っていた。

「授業をする前に再来週に行われるクラス対抗線に出る代表者を決

めないといけないな、誰か推薦者はいるか？」

クラス代表などする訳がない、もし推薦した奴は――

「私、ヒロ君がいいですっ！」

「じゃ私は織斑君がいいと思いますーす」

殺す

「ヒロ、織斑以外にいないのか？自薦、他薦も構わんぞ？」

「待ってください、納得が行きませんわ！」

大きな声を出して机を叩いたのは隣の奴だった

「そのような選出認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」俺がならずに済むのなら構わないが……

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然！それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります。」

次から次に怒濤の剣幕で言葉をあらげる。

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

一夏が反論を始めた。まあ地球でも一つではないからな俺も一夏に続き言った

「俺は極東の猿ではない」

「なっ…………決闘ですわ！」

「いいだろう」

「いいぜ」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い
————いえ奴隷しますわよ」

そのまま俺達は奴と決闘する事になった。

日時は一週間後の月曜日。相手は————誰であろうと俺は俺を信じて戦うまでだ

クラス代表などどうでもいい by ヒイロ・ユイ（後書き）

ヒイロは難しいなあ

頭の中でヒイロ絶対言わないよなあとか思いながら書いてます。変な所が会ったら教えて下さい

クラス代表決定戦 前編（前書き）

更新が思った以上に遅くなりました。すみません……

クラス代表決定戦 前編

「ふう……」

今日の授業は一通り終わり、ヒロは寮に帰ろうとした時――

「ヒロおゝ待ってくれよ」

一夏が机の上でうつ伏せて、ヒロを呼んだ。

「何だ？」

「今日俺達あんな事言っちゃったけど大丈夫なのかな？」

「クラス代表の事か？」

おそらく一夏はあれから授業を真面目に受けたがわからなかったのだろう

「ああ俺、授業何にもわかんなかった」

「気が変わった、少しだけだがISについて教えてやる」

「本当か！」

（少しでもコイツに、奴のプライドを打ち砕いてもらわないとな……）

「だが、俺が教えるのは基礎だけだ」

ヒロもあまりISについて知らないので一夏に教えられる事もあまりない。

「じゃあまず、剣術を鍛えろ」

「剣術か……？」

「ああ、そうだ。誰でもいい。だれか教えてくれそうな奴のところに行き、教えてもらえ。じゃあな」

ヒイロは、教室のドアからではなく窓から飛び降りて寮へと戻っていった。

寮への帰り道は50mはちょっとである。ヒイロはセシリアとの対戦について考えていた相手は、国家を代表している。強さは並大抵ではないはず。ヒイロは行き先を変え、寮から第三アリーナを目指した。

更衣室でISスーツに着替え、アリーナ内へと出る。

アリーナの中央へと移動し目を瞑り、集中を始める。

体中に光の粒子が発生し、ヒイロの体を包み込んだ。ヒイロの体には、Wゼロが装着された。

「任務了解……！」

次の瞬間一気に飛行し、粒子化されたツインバスターライフルを呼び出す。

今回ののは、実践的に空想されたもので、相手は攻撃をしたり、回避運動をする。

最初は二体。両方とも近接ブレードを持っている。ヒイロは、バスターライフルを連射型にして二機に放つ。

ドコオオオオン！

二機とも撃墜される。新たに五機現れ、ヒイロに向かって襲いかか

る。二機はさつきと同じ装備だが、残りの三機は射撃武器を持っている。二機は援護射撃をしてもらいながら、迫ってくる。ヒイロはライフルを連結し、的に狙いを定めた。

「ターゲットロックオン」

ビュウウウン

ライフルから巨大な閃光が放たれ、四機の的に爆散させたその時――
ライフルに被弾しなかったのが、近接ブレードを持って、ヒイロに切りかかる

「装備が重すぎるんだ……！」

ビームサーベルを呼び出し、的に頭部から両断した。
的に爆発して、落ちていく。

「任務……完了」

ヒイロは地上におり、ISを待機状態に戻した。

（やはり的じゃ……）

やはり的では、動きが機械的になる

ヒイロは更衣室へと向かい、着替え寮へと帰っていった。

寮に戻り、自分の部屋へと変える途中に何やら騒ぎ声がある。

（何かあったんだろうか……？）

ヒイロは、人混みが出来ている場所に行くとそこには女に囲まれた一夏がいた。

「こんな場所で何をしている……？」

「ヒイロ！助けてくれ！そうじゃないと俺が―――！」

ズドン！

ヒイロと一夏の間に、壁から何かが飛び出す。それを見てみると木刀だった。

するとドアが開き、中から和服姿の女子が姿を現れる

「……入れ」

「お、おう。またなヒイロ」

一夏はそのまま部屋の中に入っていった。女子達は貫かれた穴から中の様子を覗いている。ヒイロは部屋に戻った。

ボタン

ヒイロは部屋に戻り、荷物を机の上に置く。服を着替えようとしたが、夕食を食べるため着替えるのをやめ再び部屋を出て、食堂に向かった。

「……これだ」

食堂に着き、食券を買う。今日はあまり食欲がないので、フランスパン、シチュー、サラダのセットにした。

「ねえねえ私達も一緒に食べていいかな？」

話しかけてきたのは、黄色のぬいぐるみのようなパジャマを着た女子と後ろに二人の女子がいた。

「別に構わないが……」

「ありがとうお〜」

三人は、ヒイロの隣の席に座り、それぞれの夕食を机の上に置く。

「お前達は、あまり食べないな……」

「わ、私達はねっ!」

「あれだよ、あれ!食が細いつていうか!」

「お菓子も食べるしねっ!」

「そうなのか……ならいいが」

三人ともフランスパン一切れにスープとサラダだった。

「ねえねえヒイロ君の事をこれからヒーちゃんって呼んでいいかなあ?」

ヒイロは内心、驚いていた。いままでずっとヒイロと呼ばれてきたので違う名前で呼ばれたのは初めての事だった。

「悪いが、ヒイロと呼んでくれないか?」

別に悪くはない。だがヒイロという名前に誇りを持っている。だから他の呼び方であまり呼んで欲しくなかった。

「うーん、解った！じゃこれからは緋色って言っね！」

「そうしてくれ……」

発音の違いに違和感を感じたが、ヒイロと呼んでいたので許してしまった。

夕食を食べ終わり、部屋に戻る事にした

「……俺は部屋に戻る」

「おやすみいゝ緋色」

「おやすみなさいっ」

「おやすみ、ヒイロ君」

食べ終わった食器を片づけ、部屋に戻った。

部屋に戻り、服を着替えシャワーを浴びる。

いつもの緑のタンクトップとスパッツに着替えた。ベッドに横たわり、今日あった『ゼロシステム』の事を考える。

あの赤髪と、少年のような顔立ちのパイロットを思い出す。昼間も考えたように「達もあの研究に関わっているのだろうか？しかし顔は見えない。

（もしかしたら俺の思いこみか……？）

でも「達」が来ていないとすれば誰がこのISを？

「達」が来ている事を否定すれば、矛盾が引き起こる。そして「達」が来ている事を認めれば奴らの研究に荷担している事になる。

（ゼロ、一体俺はどうすればいいんだ……？）

ヒイロは天井に向かって手を伸ばす。その手は倒れ、ヒイロは深い眠りに落ちた。

チュンチュン……

太陽の朝日に照らされ、ヒイロは起きる。ベットから降り、いつものように洗面台に行き、歯と顔を洗い、制服に着替え、食堂に向かう。

いつも起きるのが早いので、食堂には誰もいない。朝の簡単なメニューを頼み、早めに食事を済ました。

（早くISになれなければ……）

駆け足で、第三アリーナ内へ向かい、ISスーツに着替え、アリーナの中央へ行く。

昨日と同じように集中し、Wゼロを装着する。

「行くぞ、ゼロ」

一気に飛翔する。的のレベルを最大まで上げる。出てくる的の数は自分が倒れるまで。つまり自分がやられれば終わりである。

バスターライフルを呼び出し、シミュレーションを開始した。

まず四機のブレードタイプと五機のライフルタイプが出現する。ライフルを連射型にして、的に打ち込む。

（早い……！）

二機には当たるものの、残りの二機は無傷である。
そして上空から、ライフルタイプの的が、実弾を撃つ。

「チッ……………」

弾が当たり、被弾する。

ヒロは変形し、ネオバード形態になり、一度距離を開く。再び変形的に向かってライフルを構える。

しかしブレードタイプの的が急接近して、ライフルを破壊した。

「邪魔だッ！」

ビームサーベルを抜き出し、的を斬る。残りの一機もこちらに向かってくるのを、マシンキャノンで打ち落とす。

「所詮は機械だ……………」

ライフルタイプの場所まで加速しながらマシンキャノンを連射する。的も連射するが、全て避けられる。

横に薙払い、二機を爆発させる。そして残りの三機も斬られ爆散した。そして今度は新たにブレードタイプが五機、そしてライフルタイプが七機現れる。
その時……………」

アリーナのスピーカーから、声が響いた。

（まったく、ヒロの奴は何をしているんだ？）

授業が、すでに始まっている時間だがヒロが教室に来ていない。
ヒロの事だから一体何をしているか――

「山田君、私はヒロを探しに行ってくる。先に授業を始めといてくれ」

「はっ、はい織斑先生」

千冬は、教室を出た。

取り合えず、ヒロの部屋に行ってみたが、いない。

（奴が行きそうな場所とすれば……）

ドッコオオン

近くで大きな爆発音が起こる。

確かあれは、第三アリーナの方だったはず。急ぎ足でアリーナへ向かった。アリーナ内へ着き、広場を見るとヒロが実戦訓練用の的と模擬戦をしている。

レベルを確かめると

「MAXだっ！奴は死ぬ気か！？」

レベルMAXは、確かIS操縦者の意志関係なく、操縦者が倒れるまで戦う。教員ですら厳禁のシュミレーションなのに、ヒロは

――

「授業をサボるとはいい度胸だな」

「お前には、グラウンド50周をする事になっているが、構わないな」

「もう、そんな時間か……」

「ああだから、早く着替えて教室に戻れ、それとも走りたいのか？」

「了解……」

そのまま、ヒロを教室まで連れていった。その時は、すでに三時間目を終わっていた

「一体、どこ行ってたんだよヒロ!？」

教室に入って最初に、一夏と会った。どうやら心配していてくれたらしい。

「別に、少し訓練をしていただけた」

「えっ? 訓練って何の……」

「ねえねえ織斑君達さあ!」

「はいはい、質問しつもん!」

「今日のお昼ヒマ? 放課後ヒマ? 夜ヒマ?」

一夏と話しているところを容赦なく襲いかかってくる。

「俺は暇じゃないが、コイツなら暇だ」

俺は、一夏の方に向かって指を指した。

一夏の周りに、女子が必然的に集まっていく。

「休み時間は終わりだ、散れ」

後ろから、織斑先生が現れ、一夏を主席簿で沈める。相変わらず一夏に敵しいようだ。

俺は、席に着く。相変わらず隣の奴が、睨みを利かしてくる。

「一体、授業も受けずに何処へ行っていraftしちゃたのかしら？」

「お前には関係ない……それと授業の邪魔だ、話しかけるな」

「ッ！？授業の邪魔ってあなたが言えますの！？」

立ち上がった奴に、後ろから黒い影が忍び寄る。

パンツ

「いっくくくく！」

「授業中に立ち上がるな」

「だってこの方が！」

すると織斑先生は、黒いオーラを出し、ドスのきいた声で

「立ち上がるな……」

「わっ、わかりましたわ……」

そして織斑先生は視線を俺に向け

「ヒイロ、あまりオルコットを刺激するな」

「考えておく……」

それから後は再び授業に戻り、四時間目が終わった

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

四時間目が終わるなり、俺に話しかけてきた。

「いや、俺は訓練機でお前と戦うつもりだったか？」

「ふっ、減らず口を。まあ、一応勝負は見えていますけど？さすがフェアではー」

俺は、奴の言葉を遮り

「この前もいったように、お前に時間を割いている暇はない」

俺は教室を出た。

それから教室で怒声が聞こえたが、無視し、それからは、職員室に行った。

「何、またアリーナを使わしてほしいだと？」

「ああ、ISの操縦に慣れたくてな」

織斑先生は、しばらく黙り込み、近くのパイルを見る。

「仕方がない、今日だけだ。お前に五、六時間目に第一アリーナの使用許可を与える。ただし、レベルは標準でやるように、いいな」

そついつて、俺にアリーナの鍵を渡す。

「感謝する」

俺は職員室から出て、急ぎ足で第一アリーナへと向かった。

そして、アリーナへ向かっている途中に

「やあ、ヒロ・ユイ君」

目の前には、少年のような顔立ちをし、緑色の髪色をしているあの、映像で見た青年と同じで俺の前に立ちふさがる。

「お前は誰だ？」

「僕かい？僕はねー」

「イノベイトとでも名乗っておこうか」

「イノベイト、お前に一つ質問したい事がある……」

「なんだい？」

「お前達は、一体何を作っている……？」

微かに奴の眉が動く。

「僕達かい？僕達はね、最強の兵器を作っているのさ」

「最強の兵器？」

「そう、それはまさにこの時代の太陽炉を使っ……おっと」
「まだだ。じゃあねヒロ・ユイ君」

奴は、俺の視界からどんどん遠ざかっていく。

（奴等はやはりMSを？）

いや、今の世界でMSはISには勝てない。

奴は、もう一度こちらへ向きを変える

「それとヒロ君。今度僕の使いを用意するから、そのときはよろ

しく」

再び奴は、向きを変え俺から遠ざかっていった。

クラス代表決定戦 前編（後書き）

えっと、この青年は誰だか皆さんお気付きですか？
ちゃんと似てるか心配で……似てたら教えてくださいね。

クラス代表決定戦 中編（前書き）

更新遅くなりましたー。すみません

クラス代表決定戦 中編

「奴は一体何なんだ？」

奴は自分をイノベイトと呼んでいた。イノベイトとは一体？まず名前ではない。そうすると人種に近い存在。しかし、この世界の話を聞く限りでは、そんな話は出てこなかった。

しかも奴は言った。最強の兵器を作っているという……最強の兵器。それはISをも凌ぐ兵器。

(MSか……？)

いや、その線は低い。MSとISの性能を比べると、この世界の現状ではMSを作っても制圧されてしまう。

他にあるとすれば……

ISを改良したもの。Wを除き、現時点では第三世代まで。

それを越えるISを作るとなれば、何かしらの支援がなければ不可能に近い。しかも支援のレベルはIS開発者並の物。やはり、最後にはあの結末に思い当たる。

(Dr. J……)

J達の機械技術の腕前は本物。並のレベルの科学者達ではない。おそらくJ達であればそのくらいはたやすいであろう。

それまでになんとしてでも、ISを使いこなさなければならぬ。俺は、アリーナに向かった

スーツに着替え、いつも通りESを展開させる。
その時目の前に女が現れた。

「やあやあこんにちは！ヒロ君！」

女は電子的なウサギの耳のような物を頭に付け、淡い青のワンピースの上に白のエプロンのようなものをつけている。

「お前は確か、篠ノ之束……」

「おおすつごーい！私の事知ってるんだ　さすが元工作員だね」

（何故、コイツは俺の素性を知っている……？）

そして束は俺が思っている事を見抜いたかのように、俺に近寄り、まじまじとWを眺める。

「うんうん！ちゃんと動いてる、動いてる！やっぱり束さんが手伝った事だけはあるねえ」

「Wはお前が作ったのか？」

「いや、束さんは手伝っただけだよ。とある研究者が面白そうな事してたから私も乗っただけ」

「とある研究者とは一体誰だ……？」

「教えない」

「お前に拒否権はない……」

俺は、束にライフルの銃口を向けた。

「私は君の事気に入ってるつもりだけどあんまり失礼な事しちゃうと……」

するといきなりISが強制解除され、体に痛みが走る。

「クッ……何をした！」

「東さんにいじわるをした罰です」

そして束が不敵な笑みを浮かべると、さらに痛み増す。

（いくらIS開発者とはいえ、ここまでとは……）

やはり、コイツも並の科学者ではないという事か。

「でも少しならヒントをあげる。科学者達はね、まだ大丈夫だよ」
「それじゃばいばい」

束は、視界から消えていく。俺の記憶はそこで途切れた。

俺は目覚めると再び医務室で寝かされていた。

あの時、束からくらった痛みは跡形もなく消えている。

（夢だったのか……？）

いや、それでは何故俺はここで寝かされている？
と考えている内に医務室のドアが開く。

入ってきたのは、やはり織斑先生だった。

「どうだ、体は？」

「今は大丈夫だ」

「お前が遅かったから迎えにアリーナへ向かうと、アリーナの中央に倒れていたんだ。」

「心配をかけて悪かったな……」

「気にするな」

そして、アリーナ内であつた事を話す事にした。

「束にあつたのか……」

「ああ、奴は俺の事を知っていた。」

織斑先生はこの事を知っていたらしい。ゼロが奴等によって作られた事をも。

「他には、何か言つてなかったか？」

「なかった……」

「そうか。後クラス代表を決めるまで、もう少しだ。明日まで休んでいいから、それまでに直すように」

「了解」

織斑先生は部屋から出ていった。

（やはり束も関わっているのか？）

イノベイトが言つた事。束の力があれば今の世代を越すものを作るのは、造作もない。

しかもあのヒントから行くと、J達は着ている。

J達と束が組めば、最強の兵器などは夢ではなくなる。

そして束が言つた最後の言葉。『科学者達は大丈夫』最初はJ達の身の事かと思つたが、違う。おそらく、J達は仕方がなく奴等に従つていて、本当は抜け出す事を考えている。そして――

（また何かコンタクトがあるはず……）

それまでの機会を待つ事にした。

クラス代表決定戦 当日

「……なあヒロ」

「……どうした」

医務室に運ばれてから三日。体の調子は、もとに戻った。

「気のせいかもしれないんだが」

「ISの訓練の事か？」

「それだ！ヒロ！一体どうなってるんだよ！？」

「一夏、俺が言った事はやったか？」

「剣術か？まあやったけど……それがどうかしたか？」

「なら問題ない……」

「なら問題ないってなあ……」

山田先生のスピーカーを使って、大きくなった声が、会話を遮った。

「織斑君！来ました！織斑君の専用IS！」

「織斑、すぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶつつけ本番ものにしろ」

「この程度の障害、男たるもの軽く乗り越えて見せろ一夏。」

一夏の方に目を向ける。おそらく奴は状況を理解していないな。

ピットの搬入口が開く。鈍い音を立てながらゆっくりと奥にあるものをさらす。

そこには『白』がいた。

(これが一夏のIS……)

純白といっていい程の白を纏っている。

「織斑君の専用IS『白式』です！」

一夏は、じょじょに近づき、『白式』に触れた。

それからは、織斑先生の指示通りISに乗り、全ての準備が整った。

「じゃあな、ヒイロ」

「行ってこい、一夏」

そして一夏は、もう一人の女子生徒との会話を済まし、飛び立った。

「オ…オイ！お前か？一夏に剣術の修業をしろなどと言ったのは？」

話しかけてきたのは、あの時、寮で一夏と一緒にいた和服姿の女だった。

「それがどうした……？」

「べつ別にどうともないが……私は篠ノ之箒だ！よろしく頼む……」「ヒイロでいい。」

何故か筭は顔が赤くなっていた。理由は分らないが、何やら恥ずかしがっているようにも思えた。俺は、筭から試合のディスプレイに視線を変え、一夏の試合を眺めた。

「よくもまあ、こうも持ち上げなてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

一夏と奴の試合は、序盤は奴の方が優勢だったが一夏の機転により、逆転。しかし最後の最後バリア無効化攻撃を使ってしまう、そのままネエルギー切れをおこし負けてしまった。

「一夏、武器は考えて使え」
「ヒイロまで……」

織斑先生の視線がこちらに向く。

「ヒイロ、次はお前の番だ」
「任務了解……」

体にISを纏わせる

「準備完了……」
「俺の仇取ってきてくれよな」
「俺は俺のためだけに戦う……」

「ヒイロ。頑張ってこい」
「ああ」

俺は、ゲートから飛び立った。

クラス代表決定戦 中編（後書き）

えっとどうでしたか？もし悪い箇所があったら、何でもいいです。
書いていただけると助かります

クラス代表決定戦 後編（前書き）

クラス代表候補戦ラストの回です。

クラス代表決定戦 後編

「お、遅かったですわねっ！」

奴は一夏の試合で、動揺しているようだ。なにせ代表候補生が初心者に負けかけたのだから。

「……」

「ふんっ！先程の試合を見まして怖じ気づいて声もでないのですか？」

「……」

ヒロは、黙り続ける。

「ああもう！黙ってなくて何かおっしゃりなさいっ！」

セシリアは、射撃体勢に移行し、そくざにトリガーを引いた。

キュインッ！キュインッ！

二発のレーザーを放ってくる。俺は横に回転し、その二発を避ける。奴はそのまま先程の試合で使っていたフィン状の小型レーザー砲を使って追尾させてきた。

フィン状のパーツは、多彩な角度から狙ってくる。ヒロは、一度変形し、セシリアとパーツから距離を取り、ツインバスターライフルを呼び出した。

「戦術レベル確認、今からツインバスターライフルを射出する……」

ライフルを連結させ、両手で奴とパーツのいる方向に構えた。

ビュウウウン

黄色い閃光が、パーツを飲み込み、溶解させ、爆発させた。奴は、回避したようだが、あつけにとらえている。

「あなたっ、なんて武器持っていますの!？」

ヒロは、そのままライフルを直しサーベルを取り替え、奴に移動しセシリアの目の前まで来たところで、サーベルを振り下ろした。

ガキイイン

激しいスパークが起きる。サーベルを振り下ろす。

ガキイイン

激しいスパークが起きる。奴もとっさに近距離武器を展開したようだ。しかし俺はサーベルをぐいぐいと押し込む。

「くっ……………!」

奴から呻き声もれた。俺は一度距離を取る。

「これで、終わりだーーーー」

再びバスターライフルを出し、ビームを放った。奴の体が、閃光に飲まれた。

『試合終了。勝者ヒロ・ユイ』

試合が終わり、ヒロはピットへ戻った。

「なかなかだったな」

周りを見渡すと、いるのは千冬だけだ。おそらくは千冬が帰らせたのだろう。

ヒロは装着しているISを解除する。

「相手が油断してただけだ」

「ふふふ、お前らしい。今日は疲れているだろう。もう寮に帰って休め」

「了解……」

ヒロはピットから出た。

千冬は、ヒロが出ていったのを確認し、深くため息をついた。

（さて、あの化け物の奴をどうするべきか……？）

あの反応速度は異常だ。胴体視力がいい奴はいるが、それに反応出来る奴は少ない。それにいくらISのブラックアウト機能があるか

らとはいえ、あの対Gは異常すぎる。

「フ……ハハハハハッ！」

千冬からふいに笑いがこぼれた。

（ヒロ・ユイ……これほどの楽しみはない！）

これからヒロにISを教えるのは私自身。そしてヒロがその技術をどう使うかは、ヒロ自身だ。

（まさにパンドラの箱だな……）

そして千冬はピットから去った

サアアアア……

シャワーノズルから熱めのお湯が吹き出す。水滴は肌に当たって弾ける。白人にしては珍しく均整の取れた体と、そこから生まれる涙線美はちょっとしたセシリアの自慢である。

セシリアはシャワーを浴びながら、物思いに耽っていた。

（今日の試合……）

あんなに、差をつけて負かされたことはない。

相手に少しもダメージを与えられずに負けたことは一度もなかった。

いつだって勝利への確信と向上への欲求を抱き続けていたセシリアにとって、この困惑はひどく落ち着かなかった。

（わたくしは負けたはずなのに……）

試合に負けて何故かスッキリとしている。そこがふに落ちない。

（……ヒロ・ユイ……）

あの男子の事を思い出す。あのまっすぐ強い心を持った瞳を。人に左右される事のない眼差し。

出会ってしまった。ヒロ・ユイと。理想の、強い心をもった男と。

翌日、朝のSHRに行くと言想通りの事が起きていた。

「では、一年代表は織斑一夏さんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですねー」

山田先生、クラスの女子も盛り上がっているなか、一夏だけが暗い顔をしていた。

「先生、質問です」

一夏が手を挙げる。

「はい、織斑くん」

「俺は、昨日の試合負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは――」

「俺が辞退したからだ」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

ヒロとセシリアの発言が同時になった。セシリアだけが立ち上がり、ヒロは座って腕組をしている。

「まあ勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然の事。それにヒロさんも辞退すると聞きましたからわたくしも辞退することにしましたの」一夏は、苦い顔をしてセシリアの話を聞いている。

「それで一夏さんにクラス代表を譲る事にしましたの。本当はヒロさんに譲りたかったのですが、この方には必要ありませんからあなたに譲ってあげますわ。」

「いやあ、セシリアはわかってるね！」

「そうだよー。せつかく男子がいるんだから、同じクラスになった以上持ち上げないとねー」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子にも情報が売れる。一粒で二度おいしいね」

そのまま一夏が、代表する事でまとまった。

「それですね」

隣のセシリアが話しかけてくる。

「なんだ？」

「あのーですね……これからなんですけどね、これから放課後いっしょにISの練習しませんか？」「何故だ？」

「い、いえ、別に。やはり二人でやったほうが効率がいいと思いついて……」

「お前が、俺の練習相手になるんだつたら別に構わない」

すると隣にいるセシリアの表情がいきなり明るくなる。

「それと……これからはわたくしの事を”セシリア”とお呼び下さい」

「別に構わない……」

すると先ほどより、さらにセシリアの表情が明るくなる。

「約束ですわよ！」

「ああ……」

「全員席につけー。授業を始めるぞー」

織斑先生が入ってくる。今日の授業が始まった。

クラス代表決定戦 後編（後書き）

どうですか？少し書き方を変えてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0795w/>

ISインフィニット・ストラトス～白き翼の敗北者～

2011年10月5日12時55分発行